

授業で必ず見せるビデオがあります。ドイツ人がパプアニューギニアのある村を観光する姿を扱った番組です。その中である観光客が「ここは自然豊かでのんびりだ」と語ります。一方で土産を売る現地の女性は「誰も買ってくれない。こっちは子どもを学校に行かせたりと大変なのに」と言います。観光客の言葉の裏には「私たちは発展し、忙しい」という認識があります。しかし、忙しいのは現地も同じで、それは土産売りの女性の言葉が裏付けています。



このようなことは日本でもあります。「〇〇人は時間にいい加減だ」とか「信用できない」等の言葉を時に聞きます。しかし上記の観光客のように相手の生活をよく知らず、表面的な理解だけで相手にイメージを当てはめて語ることも少なくありません。これらは相手を批判するものですが、実はそれ以上に「日本人は時間を守る」とか「信用できる」という思いが隠されています。

「相手にあるイメージを与えて、それとは違う私たち」という形で自分が優れていると認識する。これは世界で長いこと行われてきました。みなさんは何となく欧米は進んでいて合理的で、アジアは感情的で自然に近い

と思っていますか。欧米がアジアを昔から繰り返しそのように語り、ついにはアジアが自らそう思うようになったと言われていました。その認識は「進んだ欧米が遅れたアジアを支配するのも当然」という考えを生み、植民地支配を正当化しました。たかが異文化理解、されど異文化理解です。他人をおとしめ自分の誇りを保つという異文化理解は良いものではありませんが、つい人間はしてしまいます。私も気を付けています。

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト：県立広島大学 ロナルド・スチュワート准教授

2014(平成 26)年 広報あきたかた 3月号掲載